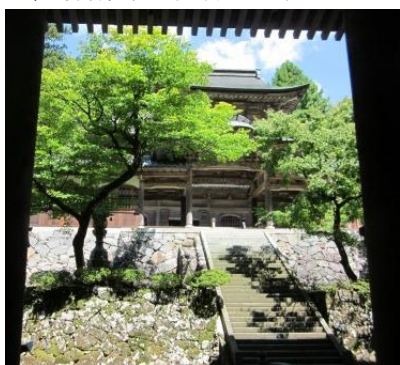


陽林会（第15回）福井県 永平寺ミニ修行の旅

平成30年9月5日

平成30年9月5日（水）林陽寺駐車場を7時15分に出発、岐阜駅にて名古屋・岐阜組の5名が乗車し、総勢25名にて永平寺に向かう。今回のミニ修行の旅は、15回の記念すべき旅でもあり、永平寺の役寮さんの協力もあって実現した旅でもあった。参加者も従来の陽林会員に加えて、林陽寺の参禅会に参加している方々も含めての25名であった。



台風21号襲来の翌日であり実現が危ぶまれたが、大した影響もなく出発することができた。仏様のご加護の賜物と感謝。誰もが安堵した出発となった。道中、台風一過、吹き返し少なく、名神、北陸道。最近開通した中部縦貫道を渋滞することもスムーズに予定通り11時に永平寺の山門頭に到着した。

車内でお話をした「杓底一残水（杓底の一残水）汲流千億人（流れを汲む千億の人）」の大きな石門を通り、通用門から上山（じょうざん）。受処（うけしょ）で手続きを済ませて案内

の雲水さんの出迎えを受けました。



永平寺は山の斜面を利用して七堂伽藍を始め多くの建物が回廊で結ばれた一大山岳寺院。階段で造られた回廊は、毎朝の掃除により掃き清められ、雑巾がけにより板がピカピカに光っているように見えます。

永平寺 山門→

諸堂拝観といって、堂内を雲水さんの案内によって永平寺諸堂の説明を受けます。





我々は、通用門から上山し、檀信徒や観光客をお迎える吉祥閣（きちじょうかく）にて諸注意を受け、最初に山門にて修行のなんたるかを掛けられた「聯（れん）」によって説明を受けました。

右側【家庭厳峻 不容陸老從真門入】

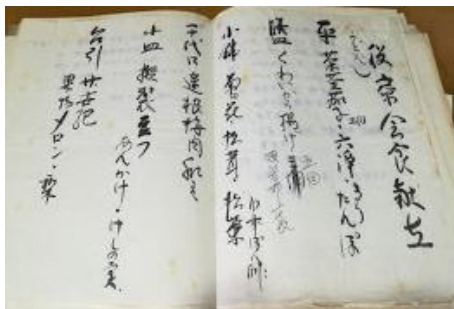
かていげんしゅん りくろうのしんもんよりいるをゆるさず

左側【鎖鑰放閑 遮莫善財進一步来】

さやくほうかん、さもあらばあれぜんざいのいっぽをすすめきたるに

右側＝永平寺という家庭は、仏祖の家訓に厳しく従う。どのような社会的地位のある人でも仏を求める心が無ければ、この門より入ることは許さない。左側＝そうであるが、この山門は鍵はかからず扉もない、入り口は常に解き放れている、善財童子のような道心があればいつでも、その一歩を進めて入れるようになっています。

まさに、永平寺即ち道元禅師の修行の根本的な意義を伝えている。ここから正面に中雀門、仏殿、法堂と中心的建物が拝観できる。次に松岡藩初代藩主松平公廟所をみて、台所を司る大庫院の韋駄天様の前にて食事の大切さの説明を受けた。この建物の正面に雲水の生活の中心となる「僧堂」があります。



庫院（くいん）というお寺の台所に当たる場所の前に大きな摺子木（すりこぎ：実際はお寺の建築の際に使った地突き棒）があり、他の人のために一生懸命努力している人の労苦を感じ取り、そのことへ感謝の気持ちを持てる…そんな人

が尊いということの詩の説明があります。

「身をけずり 人に尽くさんすりこぎの その味知れる人ぞ尊し」



庫院は、昭和5年の改築で、一階には食事を作る典座寮と呼ばれる台所、玄関の正面には足の速いことで有名な「韋駄尊天」が祀られ、二階は来賓接待、三階は150畳の大広間「菩提座」があり、賓客の接待に使われる。余談であるが、小生の雲水生活はこの庫院の典座寮にて、名典座といわれた赤崎老師の薫陶を受け、雲水生活の大半を過ごした懐かしい寮舎です。献立の写真は、老師直筆のもので



この研修の目的の一つは、永平寺の精

進料理をいただきことにありました。友人の助けもあり普段頂くことのできない「戒肴膳」という二の膳付きの料理を「菩提座」で頂くという贅沢を味わいました。味が解らないほど緊張されて、



頂かれていたように感じましたが、本山側も椅子にての接待で時代の流れを感じました。「蛇腹（じゃばら）の昆布」「ゴマ豆腐」も味わっていただき大変満足ゆく「中食（ちゅうじき）」でした。

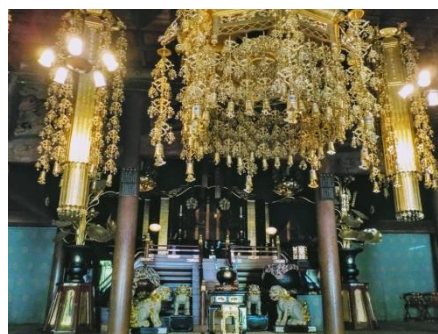
「中食」後、再び諸堂拝観。禅師様の居所「不老閣」を見ながら、永平寺の中核「法堂」へ380畳敷の堂内は中央に「聖観世音菩薩」をお祀りし、朝のお勤め各種法要、禅師様のご説法の道場でも、七堂伽藍の最も高いところにあります。

法堂から廊下伝いに曹洞宗の聖地とも言われる「道元禅師」様のお墓である



「承陽殿」にお詣りしました。「承陽」とは大

本山永平寺開山の道元禅師の諡号。明治12年に明治天皇より追贈されました。堂内に掲げられている「承陽」は、明治天皇直筆の額でもあります。途中に白山水がでていいる水屋があり、道元様に毎朝お供えいたします。



「僧堂」や「仏殿」を見ながら回廊を下り、「傘松閣」へ。天井に230枚もの華麗な日本画が描かれている安土桃山様式の156畳敷きの大広間で、別名「天井絵の大広間」と呼ばれています。著名な画家144名による力作ばかりです。このうち、下記の5つの天井絵を見つけると願いがかなうといわれています。

・りす・唐獅子（口を開けている青い獅子）・唐獅子（口を閉じている白い獅子）・鯉（2匹の白い鯉）夫婦円満・鯉（黒い鯉）天まで昇るおめでたい絵柄。説明を受け、探しました。こんな楽しみ方があったのかとびっくりしました。丁度、曹洞宗書道展の素晴らしい作品が展示されていました。当山に昭和50年に発刊されました全ての絵の図録限定千部の内NO500と印字した大変重い貴重豪華本があります。



こうして七堂伽藍をぐるり、最初に入った「吉祥閣」へ。2階の「明鏡」の間にて「坐禅」体験と「法話」を拝聴。



「坐禅」は、初めての方も興味津々、それでも30分は坐りましたね。魅力にとりつかれた方もあり帰りに門前で「坐蒲」（坐禅をするときに用いる丸い布団）を買って帰られる方もありびっくりいたしました。どうぞ「林陽寺の参禅会に来てください」と思わず案内してしまいました。

「法話」は、横山国際布教部の部長老師の道元様のお話でした。

若き道元の疑問が今日の大教団に発展、道元は9歳で母を亡くし、それをきっかけとして発心を起こして出家しました。

そんな道元は比叡山で修行を始めてまもなく、一つの大きな疑問に行き当たります。それは、

「仏教においては、人間はもともと仏性（ぶっしょうー仏になる性質）を持ち、そのまま仏であると教えている。それなのになぜ、わたしたちは仏になるために修行をしないとイケないのか」というものです。（もう少し難しい言葉で言うと「人は誰でも本来本法性、天然自性身であると言う。ならば放っておいても皆悟りを開けそうなものだ。それなのになぜ三世の諸仏は涅槃を得るに当って発心と修業を必要としたのか？」）

この問いは、仏教の根本に触れる大きな疑問です。道元は自分が抱いた疑問を比叡山の学匠（がくしょう）たちにぶつけますが、誰も満足のいく答えを与えてはくれません。それはある意味愚問であり、答えようがないからです。そこで比叡山を下り、諸方の寺々に師を訪ね歩きましたが、そこでも答えは得られません。しかし、その過程で「その問題は自分で考えてごらん」という示唆を受け取ったのでしょう。建保五年（1127）、18歳になった道元は京都・建仁寺の明全の弟子となり、その6年後の貞応2年（1223）、明全とともに宋に渡りました。もちろん、自らが比叡山で抱いた疑問を解くためです。ところが、宋に渡ってもなかなか疑問に答えてくれる人は現れません。諦めかけて日本に帰ろうとしたところで、最後に、天童山景德寺（てんどうざんけいとくじ）で如浄禪師（によじょう）という立派な師に会うことができました。この人こそ自分の求める師であるとして、道元は如浄の下に参禅して悟りに達し、長年の疑問を解き明かします。26歳のときです。

道元が、禅を修得して帰国したときの第一声は「眼横鼻直」（がんのうびちよく）でした。中国天童山の如浄禪師の下で修行して、「眼横鼻直」を悟ったのです。眼横鼻直とは、眼は横に鼻は縦についている、という当たり前の事実です。日本には仏教の軽典も仏像も持たず、空手還郷（くうしゅげんきょう（空手で故郷に還る））で帰ったのです。道元は、中国各地の禅堂で仏道を求めて研鑽すればするほど、きわめて日常的で単純なところに仏道の真髓があると悟ったのです。当たり前のことを当たり前として知ることです。また、自分を飾らず、ごまかさず、正直に生きてらいいのです。どうしても私達は、良い事を定め、嫌なことを否定してしまいがちです。しかしそれは自分の都合で、事実は色々なことが起きます。事実を総て肯定することです。全宇宙の総ての現象が、そのまま真実です。



曹洞宗では、その宗旨を、現代的に次のように説明しています。

「曹洞宗は、お釈迦さまより歴代の祖師方によって相続されてきた「正伝（しょうでん）の仏法」を依りどころとする宗派です。それは坐禅の教えを依りどころにしており、坐禅の実践によって得る身と心のやすらぎが、そのまま「仏の姿」であると自覚することにあります。そして坐禅の精神による行住坐臥（ぎょうじゅうざがー「行」とは歩くこと、「住」とはとどまること、「坐」とは坐ること、「臥」とは寝ること、生活すべてを指します）の生活に安住し、お互いに安らかでおだやかな日々を送ることに、人間として生まれてきたこの世に価値を見いだしていこうというのです。」（「曹洞宗公式サイト・曹洞禅ネット」より）

永平寺研修にあたり、永平寺を紹介すると同時の曹洞宗の教えの若干に触れ記録といたします。

(2018.09.08 岩水)